



Title	詩経中の仁の意味について
Author(s)	竹内, 照夫
Citation	北海道大學文學部紀要, 10, 1-14
Issue Date	1961-11-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33268
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_P1-14.pdf



詩経中の仁の意味について

竹
内
照
夫

詩經中の仁の意味について

竹 内 照 夫

目 次

はしがき

一 詩經中の仁を存する編章

二 叔于田・盧令二編の概観

三 仁と人

四 仁・人と倭

五 仁・人と男

六 叔・盧二編の美且仁の意味

あとがき

はしがき

この小編は、論語中の仁の的確な意味を求めてなした試論の、一部分である。実は「書經・詩經中の仁」と題して、二經を並べて扱う方が私見の開陳に便利なのであるが、紙数のことを考えて、詩經中に限った。

一 詩經中の仁を存する編章

詩經に仁の語の見えるのは、鄭風の叔于田および齊風の盧令、これ

ら二編のみである。清の阮元は、小雅の四月編中の「先祖匪人」の句中の人は仁の義に解すべし、と言うが（阮氏、論語論仁論——研經室集第一卷八一）、にわかには從えない。（匪人のことは別稿にゆずる。）毛詩の鄭風叔于田および齊風盧令の、經の全文は次のようである。

叔于田、巷無居人、豈無居人、不如叔也、洵美且仁、（毛伝。叔、大叔段也。田、取禽也。巷、里途也。鄭箋。叔往田、國人注目于叔、似如無人処。洵、信也。言叔信美好而又仁。）

叔于狩、巷無飲酒、豈無飲酒、不如叔也、洵美且好、（箋。飲酒、謂晏飲也。）

叔適野、巷無服馬、豈無服馬、不如叔也、洵美且武、（箋。適、之也。服馬、猶乘馬也。）

盧令令、其人美且仁、（伝。盧、田犬。令令、纓環聲。）

盧重環、其人美且鬚、（伝。重環、子母環也。）

盧重鋤、其人美且偲、（伝。鋤、一環貫二也。疏。一大環貫二小環也。偲、才也。）

この二編は、漢代において毛詩のほか齊・魯・韓三家の詩經中にもあつたことの証として、次の諸項を挙げうる。

一。宋の洪氏隸釈（統卷四）に、石經（竹内、後漢熹平石經）魯詩殘碑百七十三字、……又有一段二十余字、零落不成文、惟有叔于田一章及女曰雞八字可読、其間有齊・韓字、蓋叙二家異同之說也、（傍点竹内）とある。

二。清の王氏金石萃編（卷十五漢碑）に漢太尉楊震碑の文を収め、その中に、實履忠貞、洵美且仁、博學甄徹、靡道不該、とある。陳氏詩經四家異文考（二）はこの碑文について、洵、毛詩作洵、……三家今文作洵、……毛詩古文假借洵字、という。——鄭風羔裘の、毛詩は洵直且侯とする句を、韓詩外伝（卷二）は洵直且侯に作り、鄭風

溱洧の、毛詩は洵且樂とする句に、陸氏積文は、韓詩作恂、と注するから、楊震碑の恂美且仁の出処がとにかく毛詩のほかの詩にも在ることが分る。

三。陳氏四家異文考(二)の所引によれば、宋の董氏広州詩故は、韓詩の遺文として、盧冷冷の句を挙げる。ただし馮氏三家詩異文疏証の韓詩の部は、また広川詩故を引いてこれを否認し、不足信という。

四。説文解字の犬部獐字の項に、獐、健也、詩曰、盧獐獐、とあり、段注は、蓋取三家詩也、という。陳氏魯詩遺説考(五)は、この説文の説と、玉篇の、獐、力丁・力仁二切、獐獐、声也、亦作獐、という説とによつて、盧獐獐もしくは盧獐獐は魯詩であろう、という。

——魯詩たるか否かはにわかに決しがたいが、説文の引詩は、毛詩のほかにも盧令が伝えられていたことの傍証にはなる。

みぎ四項は、盧令に関してはさほど有力でないが、叔于田・盧令がいわる詩三百の中の二編として孔子よりも古くから伝承されて、周代を経て漢世に至り、諸家の詩中に存せられていたことの、推定に役だつ。——毛氏所伝の詩編がごとく孔子よりも古いことの、断じがたいことは、たとえば錢玄同が、孔子の後に詩編の亡失や補充があつたもので、毛詩中には漢代になつてからの増入もあるらしい、という旨を説く(古史弁第一冊答顧頡剛)通りであるかもしれない。叔于田・盧令のごとく、それが周代からの伝承たることはほぼ確実であつても、それが真に孔子よりも古い作品たることを積極的に証明することのできないものについては、もはや、作品の内容そのものから、その製作の新古を探るはかない。叔盧二編の章句については、先秦の文獻にその引挙がない。しかしそれが孔子よりも古い作品であることは、以下に考究するところの二編の美且仁の句の意味によつて、即ち詩の文の内容によつて証明されるであらう。

二 二編の概観

叔于田の詩は、田獵する叔の人物をはめて、洵美且仁、洵美且好、洵美且武、(まことに美で仁、まことに美で好、まことに美で武)と詠じ、盧令は各章の上句で獵犬の頸環の音をひびかせ、下句に獵人の讃辭をならべて、其人美且仁、美且鬚、美且偲、と歌う。まず美且好・美且武・(洵は毛伝の信也・マコトニの訓に異説はない)美且鬚・美且偲の意味を検討し、ついで美且仁に進もう。

美且好はウルハシク姿ヨシ、美且武はウルハシク勇マシ、と解することに古來格別の異説はない。鄭箋は武を有武節とし、即ち節度アル勇武の意とするが、それとても勇マシ・ヲヲシを否認することにはならない。

美且鬚について、毛伝は好貌・ミメヨキノ形容とし、これは陳風沢陂編の碩大且卷の句に対する毛伝の、卷、好貌、という注に等しい。

説文には、鬚、髮好貌、とあり、髮ウツクシノ形容とし、かつ詩曰其人美且鬚と説いて用例を示す。

新注(朱子集伝)は、鬚鬚好貌、とし、アゴヒゲ・ビンノ毛ノ美シキコトノ形容とする。

鄭箋は、鬚、讀當為權、權、勇壯也、という。馬氏通釈、李氏絢義などによれば箋の權はもと擢とあつたもの、擢はまた捲・拳などの字でも表わされ、勇壯の義とされる。

かように鬚については、姿ヨシ、毛髮ウツクシ、勇マシなどおよそ三説がある。

美且偲について、伝は才也とし、箋は才、多才也、といい、伝の意を敷衍している。

説文には、偲、強力也、詩曰其人美且偲、とある。しかし陸氏積文がこの句について引くところの説文の詩では、偲、強也、(力字が無い)

とある。そこで馬氏通釈は考証して、本来説文には鬻也もしくは鬻也とあり、その義は強也に同じであつたのだが、後世に原字が誤写されて強力となつたもの、従つて釈文所引の方が説文の原文に近い、と説く。

新注は髥を鬚之貌とする。

すなわち髥には、オアリ(有能ノ)・強シ・勇マシ・ヒゲ濃キなど、およそ三説がある。

さて美且鬚・美且髥について諸説のどれを採つて正解となすべきか。——毛詩盧令の序によれば、これは齊の襄公をそしめる詩である。しかし全文が美詞のみであるから、序はこう弁明する。

盧令刺荒也、襄公好田獵畢弋、而不修民事、百姓苦之、故陳古以風焉、

すなわち作詩のねらいは風刺であるとしても、詩の文はすべて狩獵をする君子の讃辭であることを、序は認めているわけである。

ここでいま一度全文を眺めると、

盧令令、其人美且仁、

盧重環、其人美且鬚、

盧重錡、其人美且髥、

この単純な形の、獵犬の勇んで振り鳴らす頸環の音を枕の句として、獵人を讃美しようとする各章の文は、必ずしもカリウドが賢君良主であり、徳高く、才秀でていることを歌うとは限らず、ただ外面的なヲラシサ・タノモシサのみを歌うものに過ぎず、外面的なヲラシサが内面的な徳や才能を連想させるとしても、それは詩の余情に過ぎない、

と解することも可能である。つまり美且仁・鬚・髥の句を外形ノミナラズ内面的ニモ優秀ナリとの趣旨に取らねばならぬ、という理由はなく、外面的ニ美シ・リリシ・勇マシなどの、外形美詞とみる方が正解であるかもしれない。

鬚は姿ヨシ・勇マシ・毛髪ウツクシなどのどれに従つても外形美・身体美の表現であるが、その文字が鬚字に従い、説文も鬚ウツクシとし、こうした、文字に即した意味を句中に当てると、美且鬚は、獵人の武者ぶりがみごとで、特にビンノアタリノ形ノヨイコトヨとほめたものと解され、句意は十分に通ずる。このような場合、文字に忠実な説文や新注の説が採られるべきであつて、ぜひとも伝や箋の説を用いるべしという理由はない。

陳風沢陂編の、有美一人、碩大且卷、という句は、下章の、有美一人、碩大且儼、という句に対し、伝が、卷、好貌、儼、矜莊貌、と説くのは、恐らく正解であろうが、この卷と盧令の鬚とを同義とすることは必然性が薄く、むしろ二語が文字を異にして表記されていることこそ、重視すべきであろう。

つぎに髥を考えよう。先秦經書中では論語に一箇所、

子路問曰、何如斯可謂之士矣、子曰、切切偲偲怡怡如也、可謂士矣、朋友切切偲偲、兄弟怡怡、(子路)

みぎの偲偲をみるだけで、これさえも釈文は、一本には偲に作る、といい、論語中の偲字の存在も疑わしいほどである。そして論語の切切偲偲を、古注馬氏は相切責之貌とし、皇疏は相切磋之貌とする。説文の偲強也の強には、シフ・ツトメテなどの義も含みうるから、切切偲偲とは互ヒニ手ツヨク励マス・磨キアフという意味になるのだ、と考えてよい。そしてまた説文の強也には、当然、ツヨシ・タクマシの義

も含みうるから、これを盧令に当てて、美且偲とは強壯の讃辞で、武者ブリノ、ミゴトニマタ強ゲニミルコトヨの意と解しえられ、これも句意は通ずる。

しかし美且偲を美且鬢に对照させると、朱子の、鬢ノ多キサマとする説は説文の強也よりも更に優るように思われてくる。——偲字に取つて強也の意味が文字本来のものであるということは、鬢字における髪ノ形容ほどに明瞭でなく、あるいは仮借であるかも知らず論語に於いては偲の異字も挙げられておるほどであるから、もし朱子説が妥当であるならば、説文の説に拘泥しなくてもよい。

朱子説は左伝宣公二年の、宋の華元を戯画化する趣旨の俗語にもとづく。この俗語はまず華子の大メダマやタイコバラのことを歌つてから、そのあとに、

于思于思、棄甲復来、

と言う。コノ于思ノ大将ハ、ヨロヒモ脱ギ捨テ逃ゲ帰ツテ来タゾ、の意であり、于思を、杜注は多鬢之貌とし、釈文は、于思如字（思字の音は普通の音）、又西才反、多鬢貌、賈云、白頭貌、とし、その他にも説はあるが、ヒゲムジャノとするのが俗語全体の趣旨にふさわしい。そして朱子は偲と思（于は接頭語として）とを音通に見て、盧令の偲の解をなしたのである。

総じて詩経の編章には、類句縁語の反復が多く、斉風の部で盧令のすぐ前にある甫田編の第一・二章、すぐあとの敝笱編の全三章でも、

無田甫田、維莠騫騫、無思遠人、劳心忉忉、

無田甫田、此莠桀桀、無思遠人、劳心怛怛、（伝。甫、大也。忉忉、憂勞也。怛怛、猶忉忉也。新注。田、謂耕治之也。莠、害苗之草也。騫騫、張王

之意。伝。桀桀、猶騫騫也。）

敝笱在梁、其魚魴魴、齊子歸止、其從如雲、
敝笱在梁、其魚魴魴、齊子歸止、其從如雨、
敝笱在梁、其魚唯唯、齊子歸止、其從如水、（伝。如雲、如雨、如水、言盛・多・衆。唯唯、出入不制。）

右のように異章同趣で、この例は三百編中に極めて多い。ゆえに一編中で章の上下を通じ文意の類同性に注意しつつ読むべきことは、詩に臨むときの原則である。——そこで、盧令の第二句の鬢を髪ノ美詞に解すべしとすれば、第三句の偲をヒゲノ美詞に解するのは、すこぶる順当である。

さて盧令の詩が獵人の外形美をたたえ、特にカミノケやヒゲを歌つてヲヲシサ・男性美を表現しようとするものであることは、少なくとも第二・三章においてほぼ明確であり、また叔于田の詩では、これの第二・三章（美且好・美且武）が獵人たる叔の外觀の美しさをたたえるものであることが、明瞭である。さすれば、二つの詩の第一章の美且仁という句は、恐らくはこれまた外形・身体ノ美を表現するものである。仁慈のごとき内面的美徳を言うものと解するのは、かえつて詩全体の趣旨に調和せぬものではなからうか、と疑われてくる。いま、毛詩中に美且武・美且偲などの形式の句を他に求めると、

自牧歸荑、洵美且異、（鄘風靜女）

彼美孟姜、洵美且都、（鄭風有女同車）

右がある。前者は、女から贈られた荑（つばな）を、美シ・メヅラシと悦ぶもの、後者は女の容姿を、美シ・ミヤビタルと嘆ずるものである。そこで毛詩中の美且武・偲の類をすべて並べると、

美且好 美しくめでたき姿
美且武 美しくりしき装ひ
美且鬢 美しく髪きららかに
美且偲 美しくひげも豊かに
美且異 美しくいとめづらか
美且都 美しくみやびやかなる

こうなるのであつて、諸句みな人、物の外観の美を表現し、まず美という不定の美詞を挙げ、且で接続して、形ヨシ・ヲラシ・ミヤビヤカナリなど、特定の美詞で締める技巧を示している。

また、魏風伐檀、秦風蒹葭の各章末句は、

河水清且漣漪、(伝。風行水成文曰漣。疏。漪、辭也。)

河水清且直漪、(伝。直、直波。)

河水清且淪漪、(伝。小風、水成文如輪。)

道阻且長、

道阻且躋、(伝。躋、升也。)

道阻且右、(箋。右者言其迂廻也。)

みぎのようで、末句同形にそろえた技巧であるが、清を共通にする三句では、漣・直・淪がみな河水ノ流レカタの限定詞であり、阻を共通にする三句では、長・躋・右がみな山道の続キカタの限定詞であつて、これらの詩句に関する限り、漣直淪もしくは長躋右は三語みな同質の意味を表わす、と言いうる。——すなわち、漣・直は水ノ流レカタに関するのに、淪は水ノ色に関するとか、長・躋は道ノ続キカタの

表現であるのに、右は道ハバの表現であるとかというようなことはない。

ゆえに、右の諸例から推して美且仁の仁は、恐らくは、第一に外観の表現であり、第二に武・鬢・偲などに同質の、即ち男性美の表現であらう、という見込みを立てるのである。

されば、叔于田・盧令の詩の全体的趣旨を察し、また他編との比較において措辞法を考えてみると、美且仁を通念的にヤサシキ・情ブカキの類に解するのは適當でなく、そのような解釈は詩の趣旨をば、気ハヤサシクテ力モチ式の男性讃美に持つてゆこうとする後世の倫理主義・理想主義に属するものであり、この仁は單純に外観上の意味でのヒトザマヨキ・ホドノヨキ・男ブリヨキ・リリンキなどの類に解すべきではなからうか。

毛詩叔于田の序によれば、この詩は鄭の大叔段を詠じたものであるが、この人は春秋隱公元年の左伝・穀梁伝などによると不良公子であるから、そこで古注孔疏は美且仁の句について、

仁是行之美名、叔乃作乱之賊、謂之信美好而又仁者、言国人悦之辭、非美仁也、

と弁解している。しかし仁がもし單なる外形ノ美詞であるならば、たとえ真にこの詩の歌うところが大叔段であつたとしても、非美仁也などと説く必要がなく、かれは、その徳はともかく、外観はマコトニリツパナ男マヘデアツタというだけのことなのである。

三 仁 と 人

さて以上は二詩の文章に即して、いわば内在的解釈によつて美且仁

の意味に関して一つの想定を立てたわけであるが、次にこの仁をば外観上の人ガラ・人ザマ・男ブリなどの美詞となしうる可能性について、もう少し一般的な、もしくは積極的な考察を加えてみよう。それは第一に、仁・人二語の語縁を吟味して、二語の間に、国語のヒトとヒトガラ・ヒトザマとの間のような類縁をみいだしうるか否かを考察すること、第二に、仁・人・男三語の語縁を吟味して、仁・人と男との間に、英語の man (人・男) と manly (男勝) との間のような類縁をみいだしうるか否かを、考察することである。

人・仁二語が語音上で親近であることは、次の諸事例で察知される。すなわち、説文に仁字の一古形を志として千声といい(人部、段氏校訂に拠る)、また千字の古形をノとして人声という(十部)こと、詩經鄭風定之方中編で田・人・千が協韻をなし、叔于田では田・人・仁が協韻をなし、楚辭招魂で人・千が協韻をなすこと、玉篇(宋重修本)に人・仁みな而真切、広韻(宋重修本)に人・仁みな如隣切、その他多くの字書韻書および現代語において二語同音であること、また論語の、孝弟也者、其為仁之本乎、(学而)を、後漢書(延篤伝)の一本は為人之本乎に作り(錢氏考異)、無求生以害仁、(衛靈公)を唐石經は害人に作り(王氏金石萃編卷六十九唐碑)、觀過斯知仁矣、(里仁)を後漢書(吳祐伝)の一本は知人に作る(錢氏考異)など、これらの事例が、仁・人二語の語音上の近似を物語っている。

また二語の意味に関しては、仁字古形の一つが、で、説文はこれを、親也、従人二、と説いて人と仁との意味関連を指していること、孟子尽心下編に、仁也者人也、とあり、告子上編に、仁、人心也、とあり、礼記の中庸・表記に仁者人也とあること、これらによつて古代漢語の人と仁とに対する觀念連合を認めうるが、ただしこの連合は、あたかも国語のヒト(人)とヒトガヨイ・ヒトデナシ・ヒトラシク(人情・人道)などとの関連や、または西欧諸語におけるヒトを表わす語と

ヒタルコトを表わす語との間の類縁に、対応するものであつて、仁に外形上ノ人ザマ・男マへなどの意味を見いだすべき直接的材料ではない。

しかし、右に查べた語音上・意味上の近縁から推して、仁が人からの派生語であらうという見込みはほぼ立つから、もし然らば仁が人から派生して、ヒトラシクアルコト・ヒタルコト・仁愛の意味に定着するに至るまでの過程で、單純に外観的な意味でのヒトザマ・ヒトガラのような意味を取る段階があつたかもしれない。——国語のヒトガラには、外見上と内面的との兩義があるが、この事はこの語が古くは外見上の意味のもので、ヒトザマ・ニンテイ(人状・人態)の類であつたことを想わせるから、漢語人の派生語中にもこのような意味のものがあつて、それが仁の語で表わされたことがあるかもしれない。そしてこの想像は、ここに倭を介して人・仁の語縁を再考するとき、臆測の域を脱しうると思われる。

四 仁・人と倭

倭は、説文に、従女仁声(女部)、とある。丁氏説文詁林(人部)によれば、徐鉉本説文に倭従女信声とあるのは誤りであつて、徐鉉の説文繫伝には従女仁声とし、かつ一切經音義の所引説文にも仁声とある。また春秋襄公三十年左氏・穀梁氏の經文、天王殺其弟倭を、公羊氏經文は年夫に作るが、年は説文によると従末千声であつて、人・仁・倭などと共に千の類音なるがために、倭夫と年夫との(いづれかを正とするところの)誤写を生じたもの、と解される。陸氏釈文は公羊氏の年夫に対して、音倭、又如字、と注し、清の趙氏春秋異文箋は、倭字可入真部、倭年音相近、故公羊作年、と説き、かつ説苑の、修文編の使王近於民遠於倭、の文が大戴礼記の公冠編では遠於年に作られて

いることを、指摘している。

また清の陳氏今文尚書經説考は呂刑編の、(今の偽古文尚書では)罰懲非死人極於病、非倭折獄、惟良折獄、の文中の死人を死倭に作る異本のあることを挙示し、この倭は人の意味の仮借であつて、誤写とするには及ばぬと判定し、案、偽孔本尚書倭字作人、段玉裁曰、倭与人、古同部同音、……此蓋漢人所引今文尚書也、今未検得出何書、という。——これは、下句の非倭折獄に誘引されて上句の人が倭に誤写されたための異本とも想われるが、しかしそれにしても人と倭との語音が極めてまぎれ易い時代がかつて有つたことの、推測材料にはなる。

また国語(晉語三)に、晋の恵公が入国即位してのち、かねて援助を乞い報酬を約した人びとを裏切つたことについて、輿人どもが歌つた誦をしるし、

倭之見倭、果喪其田、
詐之見詐、果喪其賂、

とあり、倭・田が協韻をなしている。古代詩歌に関する協韻の問題については容易に結論は出ないであろうが、陸志章の古音説略(民国三十六年、燕京學報專号之二十)の、詩經中の協韻なるものが実は嚴整な押韻であつて、令・人・田との協韻や、申・と・刑・命との協韻やは、詩經詩の作られた時代における令・刑・命などの語尾が真韻の類であつたことを想わせる、と説く考証(主として第十二章)は、倭も本来は真韻の類の語であり、すなわち人・仁に近似の語韻を有した、という推定の一根據となすに足りる。

次に倭の語意については、説文には巧調高材(段注本による。説文話林によれば、巧調高材・巧詔高材・巧媚高材・巧調高材・巧詔口材などの異本がある。)とあり、韓詩外伝(卷四)には詔也とあり、論語孔注には、倭人、

口辭捷給、とあり(公治長)、倭、口才也、とある(雍也)。詔と調には説文おなじく諛也と説くから、右の諸説はみな要するに倭に対する通念的意味の、クチサキウマキを指すものである。そしてこの意味には孔子の巧言令色鮮矣仁、という言葉の類の、口才を美德に認めまいとする気分が含まれている。国語(先に引いた晉語三)の韋氏注には、倭、偽善也、とある。

しかし倭の語をば専ら巧言令色ニシテ実ハ不仁不義のごとき意味に用いるに至つたのは、恐らく戦国時代以後のことで、春秋時代にはなお必ずしも惡詞ではなかつた、と想われる。——荀子・韓非子の書は、これに対する文獻論上の疑義が全く無いわけではないが、荀子・韓非子の書の多くの部分が戦国時代の文獻たるは確かである。(張心激、偽書通考、一九三九年、上海、子部)そして二子の書には口辭ノ才や阿諛ノ風を痛撃する文が極めて多いにも拘わらず、二書全編を通じて、わたしの檢索の限りでは、倭という語を用いることが、韓子には絶無であり、荀子には倭悦の語を三個存するに過ぎない。(王制編に倭悦、臣道編に倭説、修身編に倭兌。楊氏注は説・兌は悦に同じとする。)

また呂氏春秋にも君主が臣の阿諛迎合を警戒すべき旨を説く文はすこぶる多いが、倭を用いることは、審分覽の部、審分の条の、詔諛巧倭之人という句や、先識覽の觀世の条の、強者勝弱、衆者暴寡、以兵相刼、不得休息、倭進、という文など、二、三箇処だけである。

管・晏・商子らの書と称するものの、純粹な戦国作品でないことは常識であるが、これらの書においてさえ倭の使用は僅少であつて、管子の巧倭(重令編)・倭人(宙舍)など二、三回、晏子に讒倭(第八)倭人(第二十二)など二、三回、商子に巧倭(賞刑)一回あるに過ぎない。

孟・墨・老・莊の諸子の書は、右に引いた諸書にくらべて戦国の一層古い時代にその原作の大部分もしくは一部分を有するもの、と認めうるが、(これに関する考証は別稿にゆずる)墨・老には倭が一語も無

く、孟では、孔子曰、惡佞恐其乱義也、(尽心下。趙注。佞人詐飾似有義者。)という一文のみ。また莊子は、その内編中には佞を一つも示さないが、付加的な外・雜編中には佞人(在宥編・則陽編)・佞諂(秋水)などの語を二、三回用い、かつ、莫之顧而進之、謂之佞、希意道言、謂之諂、(漁父)という文をも存する。

戦国諸家の説を伝える書中の佞について、右のような使用状況をみれば、惡詞としての佞は戦国の早期にはまだ常用的な語でなく、戦国の晩期に至つても、なお言論上に頻発するほどの常用語ではなかつたという推察がつくであろう。

そして、戦国時代を通じて佞を惡詞に用いる慣習がさほどに普遍的ではなかつたらしいことに並行して、春秋時代から戦国にかけて、佞を美詞に用いる慣習の、たとえ微弱であらうとも、とにかく存在したことが不佞という語の残存によつて推定される。すなわち、左伝には寡人不佞(成十三・僖十・十五・昭二十五・哀二十)、孤不佞(昭二十二)、亡人不佞(昭二十)、臣不佞(襄二十六・昭二十)などが見え、国語には余一人不佞(周語之中)、我不佞(晉語二)、夷吾不佞(晉語二、夷吾は晋の恵公の名)などがあり、戦国策に寡人不佞(秦策上・燕策下)・臣不佞(燕策下)などが用いてあり、また

左伝成公十六年、諸臣不佞、杜注、佞、才也、

晉語二、夷吾不佞、韋昭注、佞、才也、

とあるように、不佞で自謙の詞となり、フツツカモノを表わす。ゆえに不佞の佞は美詞であつて、これを仮りに佞才と呼ぶことにすると、一般に惡詞が美詞に転ずることは稀で、美詞が惡詞に化することの方が多いのだから、佞の語義の来歴において佞才の意味が佞姦の意味よりも古いと認めねばならない。そして不佞は、左伝や国語に比しても

つと文献の純度の高い春秋公羊伝にも、僅少とはいえ存録されているから、(昭二十五)伝に臣不佞および喪人不佞の語があり、喪人は魯の昭公が出国中の謙詞、春秋戦国の際の古語たることは確かである。

また、先に挙げた春秋襄公三十年経文の王子佞夫と年夫との正誤に關して、もし左穀に従い佞夫を正とすれば、この、人名たる佞は恐らく美詞であろう。左伝昭公二十四年・二十九年に周の陰不佞なる人物が登場しているが、この不佞は故意に惡詞もしくは謙詞を取る命名法にもとづくかと察せられるから、これに對照すると王子佞夫の方は美詞としての佞を用いたものと解される。

右のような、佞に美詞たる古義があつたという推則は、これを論語中の佞に照合するときに一層確実になる。論語には

或曰、雍也仁不佞、子曰、焉用佞、禦人以口給、屢憎於人、不知其仁、焉用佞、(公治長。孔注。佞人。口辭捷給)

子曰、不有祝鮀之佞而宋朝之美、難乎、免於今之世矣、(雍也。孔注。佞、口才也、祝鮀、衛大夫子魚也)

子曰、是故惡夫佞者、(先進。孔注。疾其口給而遂已非、而不知窮)

微生畝謂孔子曰、丘何為是栖栖者乎、無乃為佞乎、孔子曰、非敢為佞也、疾固也、(憲問。皇疏。微生畝見孔子東西遑遑、屢適不合、故言、丘何是為此栖栖乎、將欲行詐佞之事於時世乎)

顏淵問為邦、子曰、放鄭聲、遠佞人、鄭聲淫、佞人殆、(衛靈公。孔注。鄭聲佞人亦俱能惑人心)

孔子曰、益者三友、損者三友、……友便佞、損也、(季氏。阮氏校勘記。便佞、說文引作諂佞、諂、巧言也。鄭注。便、弁也、謂佞而弁也)

これら六項の佞がある。

このうち公治長編の仁而不佞について劉氏正義が、當時尚佞、見雍不佞故深惜之、というのは妥当であり、これに對して焉用佞と答えた

孔子や、孔子をすら無乃為佞乎と非難した微生畝や、かれらは佞に對する世の風尚に向かつて異論を放つ人びとであつた、と想われる。

また祝鮀之佞・宋朝之美に對する皮肉や、鄭声・佞人についての警告は、孔子が世俗的の美は淺薄であり、虚偽であつて、眞実の美は道德的善に一致すべく、感覺的・官能的の美に對する倫理的の美、すなわち善の優越が認識さるべきである、と考えていたことを物語るが、これは自然に當時の佞が後世のごとき惡詞ではなくて、何らかの意味における美詞であつたことを示すであらう。——容姿が美シとか口ノキキカタガウマイとかは、そのこと自体としては排斥されるべき稟賦・性能ではなく、むしろ世人のうらみ、はめたたえる美質・美才であるにも拘わらず、外面的・外発的の美に對する内面的・徳性的の美の優越の主張において、容姿ノ美や辞令ノ巧を蔑視しようとする傾向の生ずることも、また世の常であり、これは孔子時代のみの現象ではない。

すなわち佞は春秋時代の後半期に起つた、孔子の意向をもつてその典型とするような、巧言令色への反発思想のために次第に変貌せしめられ、戦国時代を過ぎるあいだに、いつしか美詞たる元意を喪失してしまつた、古語の一つであり、孔子時代にはなお、氣ガ利イテキル・ジョサイナイ・応待ガウマイなどの外発的才能に關する美詞たる性質をも十分に保留していたもの、と想われる。

してみれば、論語には六回にわたつて出る佞が、老墨孟子・莊子内編・韓非子には絶無であり、(孟子中の一出は孔子の語) 荀子・呂覽にも僅少であるという現象は、これを次のごとくに解釈しうる。

すなわち、孔子時代における孔子的傾向の佞才排斥思想のために、佞の美詞たる古意が薄弱となつたから、従つて諸子の論中に美詞の佞が用いられることも無いが、しかも佞の惡詞たる新意味はまだ確立せず、不佞が謙詞として通用するような遺習もあつたほどだから、従つ

て諸子の論中に惡詞の佞は用いられることも無くて過ぎ、戦国末期に至つて漸く佞の義の佞が積極的に使用されるようになったのである。

なお、右の考察に關連してここに指摘しておきたい五つの事項がある。すなわち、

(一) 左伝には姦人邪臣の言行やその批評が多く記されているのに、佞姦の意味の佞は一つも用いられていない。この事は、左伝の文が、佞に關する限り、春秋時代というものに対して忠実であることを示す、と思われる。

(二) 公羊伝には惡詞たる佞が一回用いられている。莊公十七年經文の、齊人執鄭瞻、鄭瞻自齊逃來、について、伝文に、此鄭之微者、何言乎齊人執之、書甚佞也、……自齊逃來、何以書、書甚佞也、曰、佞人來矣、佞人來矣、とある。ただ一回ではあるがすこぶる激しく佞人に反発しており、そこがいかにも孔子的である。——左伝に案ずれば鄭瞻は鄭の行人として齊に使いした人。鄭は小國をもつて大國の間にあつたために、その外交官は殊に辭令に優れていたから、瞻も定めし佞であつたであらう。そしてその佞才は当時必ずしも惡徳でなかつたわけだが、孔子的意向においては排斥すべきものとなつた。ゆえに鄭瞻が鄭の行人であり口才ノ人であつたとすると、公羊伝のこの伝文内容は、忠実な孔子教徒たる公羊氏の言いぶんとしては、もつともだが、かなり誇張された佞の非難だ、ということになる。

なお穀梁伝には、ただ、鄭瞻、鄭之佞人也、とのみある。

(三) 國語には不佞のほかに佞を用いた文は、先に挙げた、佞之見佞、果喪其田、云々の民謡のみである。この佞を草注は偽善と説くけれども、もしこの歌が真に晋の惠公時代(惠公死は孔子生の約百年前)のものであれば、先述の推察に照らして、偽善のごとき惡詞なのではなく、単に利口ノ・巧言ノという意味にとどまるべく、佞之見佞云々と

は、利口ガ利ロニシテヤラレ……と解すべきであらう。

(四) 尚書舜典の任人という語、皋陶謨の巧言令色孔壬という句とに
ついて、偽孔伝は、任・壬を倭に通ずるものと解し、爾雅釈詁にも
任・壬ハ倭ナリと説く。この事は倭が語音上で壬・任に同類であつた
ことの推測資料にはなるが、真に舜禹の古代（舜禹の實在か否かはともか
く、周よりも遙かな古代）に倭姦の意味の倭（壬・任）が存在したことの推
測材料にはならない。舜典・皋陶謨に、もしその意味の倭があるとす
れば、その事は、これらの文章の作られたのが、倭才に対する指弾の
生じた時代、即ち春秋時代の後期以後に在ることを示す、と思われ
る。

(五) 尚書呂刑には、非倭折獄、惟良折獄、という文があり、偽孔伝
に、非口才可以断獄、惟平良可以断獄、とある。原文で倭が良に対比さ
れ、倭才をば好マシカラヌ才能とみていることが確かである。ゆえに
呂刑編も舜典・皋陶謨に同じく春秋後期以後の作であらうことが、倭
を含む文に関する限り、推察されるのであつて、呂刑序文の、穆王
（その在位の末年は春秋魯の隠公元年の約二百年前）が呂侯に命じて編述さ
せたという言葉は、信じがたい。

さて先述のように、孔子時代には倭になお社交的美才・対人態度ノ
洗練のごとき意味が保有されていた、という推定、おそび、倭が人・
仁に同類音の語たる由来を持つ、という推定の上に立つと、倭の原初
的な語意は、ミバエノスル人ガラ・ヨイ人ザマの類であつて、これが
転じてヒトヅキノヨイコト・ジョサイナサ・利口の類となつた。と想
像される。

倭と人・仁との語音上の親縁が同時に語意上の同原性を表示するも
の、との想定に立つ限りは、倭才のごとき主体的、意識的な才能發揮
をば表示する語の、その原初の意味は、仮りに倭美とも呼ぶべき、

客観的・外形的な美姿・美態の形容であつた、と解するのが妥当であ
る。

ここにおいて人・仁・倭の三語を並べて考えると、まず、ヒトの意
味の人があり、人ノミエカタ・人ザマ・人ガラ、および人ヅキ（対人
態度）の意味が人に付加されて、ここに仁が派生し、良キ人ガラ情
ブカキを表わし、別に倭が派生して、ヒトヅキヨキ利口ノを表わす
に至つたもので、仁・倭ともに元意では人ノミエカタ良ク美シク見
エル人ザマのことであつた、と察せられる。

以上、倭について考察したところを要約して、それと仁の古義の一
つとの關係を言えば次のようである。——倭は語音上で仁に近く、二
語は人から派生した姉妹語たる見込みを立て得るが、この推測は、仁
の古義がヒトノ見エカタ・人ノ外觀を含む、という推測を可能にす
る。もし然らずとすれば、倭がもと倭美・倭才のごとき美詞の意味を
持ち、しかも仁に近似の語音を持つことの原因が、理解しがたくなる
のである。

五 仁・人と男

説文（男部）に、男、丈夫也、從田力、言男子力於田也、とあり、
会意文字に説くが、田は声符とも解し得る。かの叔于田では人・仁・
田が協韻をなし、晉語で倭・田が協韻をなすから、人仁倭男四語の類
音關係は既に認められる。また班氏白虎通義（爵部）に

王制曰、公侯田方百里、伯七十里、子男五十里、……公者通也、公
正無私之意也、侯者候也、候順逆也、……伯者白也、……子者孳
也、……男者任也、

とあるが、清の陳氏白虎通疏証(一)は、

(一) 經典釈文によれば孝經孝治章の鄭玄注に、伯者道、男者任、とある。

(二) 尚書禹貢の二百里男邦が史記夏本紀では任、国に作られている。

(三) 白虎通の文は公侯伯子男を通侯白華などの疊韻語や類音語で解くものだから、男と任とも古音上では相い近似する語音であったのであらう。

みづ三項その他を挙げて、男・任二語が本来は同類音の語である、と説く。——漢書(伝六十九)王莽伝に、王氏一族の封爵の件を叙して、細麻為男、其女皆為任、という文があり、その頭注に、任、充也、男服之義、男亦任也、とあるが、朱氏説文通訓定声(臨部)はこの任について、按亦男爵也、易其字以別男子之称耳、という。即ちこの漢書の記事は、同じ筆者(班氏)による白虎通義の、男_二任説とあい表裏しているわけである。

また舜典の、柔遠能邇……而難任人、の任、および皋陶謨の、何畏乎巧言令色孔壬、の壬について偽孔伝は倭ナリという。これは爾雅釈詁の、允・任・壬、倭也、の文に符合するから、舜典・皋陶謨・偽孔伝の来歴に関する検討は待たずとも、とにかく漢代には任・壬と倭とを同音に扱いうるとする伝承のあつたことは、確かである。

また論語陽貨編の、子曰、色厲而内荏、譬諸小人、其猶穿窬之盜也与、の荏について孔注は、

荏、柔也、謂外自矜厲而内柔倭者也、
といい、皇疏所引の江氏の説には、

古聖難於荏人、今夫子又苦為之喩云云

とある。孔注は荏と倭との語縁を積極的に提示するものではないが、江氏説は舜典の任人をもつてこの荏に同視したわけである。

右のように任・男の音通と、任・倭の音通とを並べてみれば、男が

倭—仁・人に同類音の語に属すると推測することは、不可能でない。かつ、ヒトを表わす語とヲトコを表わす語とが、しばしば同源的であることは、西洋諸語にもその例があるから、すでに男—任—倭の語音關係が認められる以上、漢語の男はもと人の派生であつて、倭・仁とは姉妹語の關係にある、という想定も、單なる臆説ではないであらう。

六 美且仁の意味

さて上代の考察は、一に仁・人二語の、二に人・仁・倭三語の、三に男・人二語の、それぞれ同源性を推定し、もしくは想定したものであるが、これら三項の目的は、叔于田・盧令の美且仁を、ヒトザマヨキ・男ブリヨキの意味に解しうるための、客観的資料を仁の語原論から検出することであつた。そして検出されたのは、

(一) 仁・倭は人から分出した姉妹語であつて、人ノ外觀—人ノ外觀ノ美を共通元意とする、という推測が可能であること。

(二) 男は人の派生語であつて、仁・倭に深い語縁を有する、という推測が可能であること。

この二項である。

いま右の二項を、先述の叔盧二詩に関する内面的考察の結論に加えて、二詩の美且仁の句についての、わたしの検討のすべてを要約すると、次のようである。

第一に、二詩の表現の全体的趣旨は、男子を、その男ブリの最もよく発揚される機会の一つたる狩獵において讚美するもの、男ノ讚歌である。

第二に、美且仁は、この類の句法から推して、外觀美の表現である。

第三に、仁は倭と共に人から派生し、ミバエノスル人ガラを元意と

詩經中の仁の意味について 竹内

して含み、かつ男にも同原的であつて、男ブリの觀念に緊密である、と推測しうる。

ゆゑにこの三条によつて、美且仁の仁は、ヲラシキ・リリシキという意味を表わす、と解釈すべきである。古来の注釈中、結論的にわたしの推定と一致するのは、たとえば宋の莊処義の毛詩補伝（逸齋詩補伝 卷七）の、

詩人夸美叔段、……美且仁、謂其威儀也、……是詩三章皆賦也、

という、叔于田を單純な狩獵公子の外觀の讚歌とする説である。ただし同書は盧令については、

仁、仁愛也、……嘆其人美而有仁愛、（卷八）

と釈して、詩經の仁について定見なきことを示している。

なお、この仁をヲラシキ・リリシキと解すべしとする私見は、たとえ男と人・仁・倭との語縁は肯定されずとも、仁と人・倭との同原性が認定されうる限りは、仁をミバエノスル人ガラとは解しうるのだから、その意味をば、この二詩の文中ではヲラシキ・リリシキに限定しうるものとして、成立するであらう。

あとがき

詩經・書經中のものを含んで春秋時代以前の、古い仁の意味に関しては、加藤常賢博士の、尚書講義・金縢・予仁若考の解、説文の几字解、仁人論、その他や、陳榮捷氏の、孔子の仁の展開論や、屈万里氏の詩經小雅四月・匪人の解や、その他参考すべき研究が少なくない。

それらに対する感想や、それによつて反省を加えた、仁に関する私見全体の開陳には別の機会を得たい。

なお、この稿を書いたのちに、韓非子中で、有度篇に倭姦の意味の倭を一つみつけた。ただし有度篇は韓非子の後人の作かと強く疑われている。（張氏偽書通考、その他）

昭和三六年夏記